研究ノート

ハンス・メディックのプロト工業家族経済論

高木正道

はじめに
Ⅰ プロト工業システム
Ⅱ 農民世帯とプロト工業世帯
Ⅲ 家族経済の機能モデル
Ⅳ 農村家内工業と市場経済
Ⅴ 家族経済と商業資本
Ⅵ 世帯形成と家族構造
Ⅶ 「平民文化」の諸相
Ⅷ 若干のコメント

はじめに

70年代の経済史研究を特徴づける顕著な傾向として，従来意識的にせよ無意識的にせよ思考の前提とされてきた近代国家や国民経済の枠組を相対化しようとする試みを指摘することができる。その第一は，国民経済成立以前は言うまでもなくそれ以後も存在し続けた，地域経済の自立性・多様性に注目する立場であり，第二は，一国経済の枠組をこえる世界システムの形成と変容を重視する立場である。これら二つのアプローチは，一見したところ逆方向を向いているかのように見えるが，理念としての近代国家や国民経済の枠組を相対化することを通じて，現実を捉え直そうという共通の問題意識に基づいているように思われる。ここで取りあげる「プロト工業化」論も，地域経済を重視する点で第一の傾向を代表すると同時に，地域経済の世界市場との関連に着目する点で第二の傾向とも接続しており，70年代の問題関心のあり様を極めて明瞭に示していると言うことができる。(1)

さて，プロト工業化論は，フランクリン・メンデルス（F. Mendels）の，18世紀フランドル地方の工業化と人工圧力に関する博士論文(2)から始まった。それは1969年のことであ

ったが，その後かれがフランドル・モデルの一般化を図った論文「プロト工業化――工業化過程の第一局面」[3]（1972年）を発表するに至って，人々の関心を惹くようになった。そしてそれ以降，「プロト工業」あるいは「プロト工業化」という用語も，欧米の経済史・社会史研究において定着していった。

ところで，十数年前から欧米の経済史学界において注目を集めてきたこのプロト工業化論がわが国で問題にされるようになったのはここ数年のことであるが，われわれはすでにその有効性の吟味や問題点の指摘を含むいくつかの論文，ならびにプロト工業化論をわが国に適用した優れた歴史分析を手にすることができる。[4] だが，これまでのところわが国では，メンデルスの研究成果は比較的よく紹介・検討されているのにたいして，ゲッチンゲン・グループの一人ハンス・メディック（Hans Medick）のプロト工業化に関する理論は，社会史研究，とりわけ家族史研究の分野で大きな影響を及ぼしているにもかかわらず，[5] 詳しく取り上げられたことはほとんどないように思われる。本稿では，メンデルスらのより経済史的な方向に対して，より社会史的な方向を代表するハンス・メディックの「プロト工業家族経済」論の特徴と論点を整理・紹介し，若干のコメントを加えてみたい。そのさい，以下に掲げるメディックの文献は，記号〔A，B〕で示し，それぞれのページ数をアラビア数字で表すことにする。

A＝Zur strukturellen Funktion von Haushalt und Familie im Übergang von der traditionellen Agrargesellschaft zum industriellen Kapitalismus : die proto-industrielle Familienwirtschaft, in : Werner Conze (Hrsg.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*, 1976, S. 254-282.

B＝Die proto-industrielle Familienwirtschaft, in : Peter Kriedte, Hans Medick, Jürgen Schlumbohm, *Industrialisierung vor der Industrialisierung. Gewerbliche Warenproduktion auf dem Lande in der Formationsperiode des Kapitalismus*, 1977.

また，次の二つの文献も参照・利用した。

The Proto-Industrial Family Economy : The Structural Function of Household and Family during the Transition from Peasant Society to Industrial Capitalism, *Social History* 3(1976), pp. 291-315.〔上記Aの英語版〕

The Proto-Industrial Family Economy, in : Peter Kriedte, Hans Medick, Jürgen Schlumbohm, *Industrialization before Industrialization: Rural Industry in the Genesis of Capitalism*, translated by Beate Schempp, 1981.〔上記Bの英訳〕

I　プロト工業システム

「プロト工業家族経済」（proto-industrielle Familienwirtschaft）とはプロト工業化を担った家族経済という意味で，これから詳しく見るように具体的にはプロト工業化期

における農村の「家内工業の家族経済」（hausindustrielle Familienwirtschaft）を指す。

「工業化過程の第一局面」[6]，「工場制度以前の工業化」[7]または「工業化以前の工業化」[8]としての「プロト工業化」[9]は，「住民のかなりの部分が，全くあるいは少なからず，地域をこえた国際市場向けの手工業製品の大量生産で生計を立てる農村地域の形成」（B.26）と定義される。その主要な時期は，ヨーロッパではおよそ16世紀から19世紀初めまでの期間に当っている（A.260）。それゆえプロト工業化は，封建的な農業諸社会から産業資本主義への大転換過程のいわば第二局面を成し，この局面における推進力であった。

ところで，封建制解体過程の第一局面は中世中期に始まり，この時期に都市における手工業生産と農村における農業生産という分業関係が形成され，それと同時に農村人口の分化と分極化の過程が進行していった。この都市と農村の分業は当初は手工業経済を成長させる原動力であったが，歴史的経過の過程でそれは逆にその桎梏と化してしまう。というのは，都市経済の供給弾力性は，ギルドによる保守的な経済政策によって低く抑えられていたので，増大する工業品需要に対応しきれなくなったからである。こうして商業資本は，この問題を解決するために，工業生産の場を都市から農村へと移していくことになった。農村には，分化と分極化の結果，商業資本の利用できる潜在的労働力が形成されていたからである（B.26,28）。したがって，プロト工業化は，都市が工業生産を独占する都市と農村の分業関係の解体として現われるのである。

このプロト工業化の時期を特徴づけるものは，農村家内工業の生成と拡大と最終的衰退である。プロト工業化は地域と部門により大いに違った経過を辿ったのであるが，にもかかわらず――鉱山部門は例外として――そこには共通の構造的基本関係が認められた。すなわち，家族経済に基づく家内工業的生産様式と商業資本との密接な結びつき，これである。つまり，家内工業を営む生産者たちは，買い手や売り手として自ら市場に現われるにしろ，あるいは問屋制度に組織されているにしろ，常に直接・間接に商業資本に従属していたのである（A.260）。

工業を営む家族経済と商業資本とのこの独特な結びつきの歴史的位置は，プロト工業化の社会経済的な発生条件から認識できる。マクロ史のレベルで見ると，プロト工業化は二つの長期にわたる発展の相互作用の帰結として現われる。まず第一にそれは，ヨーロッパの伝統的な農民諸社会の不安定化と分解の結果にほかならない。農村住民の人口増加と社会経済的分極化は，とりわけ中世中期と16・18世紀に，恒常的な不完全就業状態にある階層，つまり農業だけでは生活していけない多数の小農や零細民をつくりだした。この発展こそ，工業的商品生産が農村に浸透していくための重要な前提条件であった。というのは，小農や農民以下の人々に残されていた窮余の策としては，土地集約的な農業生産から労働集約的な手工業的商品生産への部分的または全面的な移行しかなかったからである。このような観点からすれば，プロト工業化は，「無制限の労働供給のもとでの経済発展」[10]（W.

A.ルイス）の特殊形態と見ることができよう（A.261）。

しかしながら，農村におけるこのような潜在的不完全就業労働者の手工業的大量生産への移行は，第二の要因のインパクトを受けてはじめて現実のものとなった。すなわち，プロト工業化の展開は，商業資本によって支配された，ヨーロッパの範囲をこえる世界市場の生成と密接に結びついていた。農村における手工業的大量生産をもたらしたものは，国内需要よりもむしろ，プランテーション経済と奴隷貿易によって特徴づけられた17世紀の「新植民地主義」[11]（E.J.ホブズボーム）以降急速に増大してきた海外市場での需要であった。これに応えようとした商業資本は，ギルド制度に組込まれた都市経済の低い供給弾力性に見切りをつけて，農村の潜在的労働力に触手を伸ばし，手工業的商品生産をますます農村に移していったのである（A.261）。

しかしながら，農村工業の生成と発展と最終的死滅は，こういったマクロ史的条件だけで説明しきれるものではない。というのは，「プロト工業」（Proto-Industrie）は「家内工業」（Hausindustrie）であったからである。それゆえわれわれは，もう一つの重要な側面に，すなわち，市場と貨幣関係によって，また商業資本によってますます支配されていく経済環境のなかで，農村家内工業者の世帯と家族が繰り広げた固有の動態的過程に，目を向けなければならない（Ebd)。

農民経済の場合と同様に，農村工業の生産過程は主として個々の小生産者たちの家内経済（Hauswirtschaft）に基づいていた。だがプロト工業世帯と農民世帯は，単なる生産形態上の特徴を共有するだけではなかった。この生産形態上の共通性をこえて，両者は，「全き家」[12]（O.ブルンナー）という社会的形態をとった労働と消費と世代の再生産の機能的・構造的統一体という点でも共通していた。確かに農村家内工業者の「全き家」にあっては，生産する経営と消費する世帯から成るこの統一体は，農民世帯がもっていた相対的なアウタルキーを失っている。それは，農業的生存維持基盤の喪失のゆえに，農村家内工業者の生産と消費と世代の再生産がますます市場に依存するものになっていったからであるが，にもかかわらず家族経済と「全き家」は，農業的生存維持基盤がすでにかなり消滅してしまった時点でも，経済的・社会的構成要素として機能し続けていたのである。それもそのはず，プロト工業化の過程における世帯の中心的な機能上の役割を規定したのは，労働と消費と再生産の自立的統一体としての伝統的家族経済の慣性にほかならなかったからである。プロト工業世帯と農民世帯との相違は，これから見るように，それらが社会経済システム全体のなかで果たした異なった機能に求められる（A.261-262；B.90-91，94 ff)。

Ⅱ 農民世帯とプロト工業世帯

農民経済が領主制によって規定された生産関係の制約を受けていたヨーロッパの前資本主義的農業諸社会においては，農民の世帯と家族が，所有関係と生存条件の「社会的再生

産」の過程において中心的な役割を演じると同時に，生産と再生産の過程への領主の政治的介入ならびに農民の労働収益の相当部分の強制的領有が，それらの社会の経済メカニズムにとって構成的な意義をもっていた。領主と農民世帯の非対称的関係は，かなりの「剰余」を――労働地代・生産物地代あるいは貨幣地代の形態で――政治的権力の保有者に移転させた。だがそのような「負担」は，それが社会経済システムを規制する唯一のメカニズムになるほど，社会全体または農民の「部分社会」[13]（A.クローバー）内において，生産過程と資源の分配・再分配を規定してはいなかった。農民の「家産」を成す「家」と「耕地」が密接に結びつき，しかもこの結びつきは農民の村落共同体に深く根ざしていたので，これを通じて地方独特の「自治的な」規則体系が形成されていた。農民の「部分社会」における資源の分配と再分配は，この規則体系を媒介として，家族周期・親族関係および結婚や遺産相続によってつくりだされる諸関係に結びつけられていた。そしてこのような社会的再生産の過程は，領主のコントロールと「社会的・家族的規則体系」（W.シャウブ）の相互作用を通じて，安定した数の労働力および消費者と狭隘な生存維持基盤との均衡を長期的に達成するような仕方で行われたのである（B.91-93）。

生産と支配・所有関係と生存条件とのこうした統一は，農民の土地保有と領主の「所有権」とから構成されていたので，もともと矛盾を孕んでいたのであるが，プロト工業化地域においてこの統一が，したがってまたこのシステムの核が解体する。農村家内工業者の「全き家」がその土地保有とともにその農業的生存維持基盤を失っていくにつれて，それは農民の「部分社会」の伝統的な「家族が織りなす組織」[14]（P.ラスレット）から切り離されたばかりでなく，それは領主制のうちにその種々の表現を見出した「封建的」生産関係の外部ないしは少なくともその周縁に立つことになった。より多くの家族労働力を農村家内工業に振り向けることによって土地不足を補おうとする試みは，二重の効果を及ぼした。それは，小農と農民以下の世帯から工業的商品生産への移行の決定的な規定要因として，家族の内的構造と役割分担の変化ならびに親族関係の意義の変更をもたらしたばかりでなく，社会経済システム全体における世帯の機能をも変えたのである（B.93-94）。

農民世帯においては，生産と消費の規制はなによりもまず，自給自足を目指す相対的に閉鎖的な生存維持経済ないし家内経済の欲求充足と，制限されたその実現可能性とに適合させられねばならなかった。といっても，このことは決して「限定的な交換」を排除するものではなかった。これにたいして農村家内工業者の「全き家」においては，生産する経営と消費する世帯の生存維持経済的統一体は，すでにこの相対的なアウタルキーを失っている。土地不足の家内工業者や土地のない家内工業生産者たちにとって，世代の再生産は，相対的にインフレクシブルな農村の所有構造の「社会的再生産」と結びつく必然性はもはやなくなってしまった。こうして，生産と消費と世代の再生産は，ますます農業的生存維持基盤から切り離されていった。がしかし，「全き家」という社会形態は，その農業的生存維持基盤の大部分がすでに消滅してしまってもまだ，依然として有効な経済的・社会的

構造契機を成していたのである（B.94-95）。

というのは，こうした新しい条件下においても，世帯はやはり伝統的な「家族経済」の構造的・機能的諸前提に結びつけられていたからである。農業的生存維持経済の「限界収益」が逓減すると，小農や農民以下の周縁層はますます工業的商品生産に依存するようになっていったが，しかし，完全に営利と交換の論理に与したわけではなかった。農民と農村家内工業者の行動様式はともに，「全き家」における生産と消費と世代の再生産に固有の原理にしたがった特殊な論理によって規定されていたのである。社会史のミクロ的観点からすれば，農村における工業的商品生産の起源と推移と最終的危機は，その解体段階に入った伝統的な農民の家族経済の「限界労働」と「自己搾取」の帰結として現われる（後述参照）。プロト工業化は，市場関係と貨幣関係ならびに商業と販売の資本主義的組織によってますます規定されつつある経済的・社会的脈絡のなかで発展したのであるが，しかし同時にそれは，資本主義的な利益獲得と収益性にたいする資本主義的態度が，生産と再生産の領域には，徐々にないし不十分にしか進入していなかったことによっても特徴づけられていた。しかも，農村の生産者の家族経済と「全き家」というその社会的組織形態が歴史的な推進力としての機能を果たしえたのは，まさにこうした「後進性」によるものであった。家族経済は，前資本主義的社会形成の決定的な構造要素として歴史を推し進める条件であったし，また特殊な生産様式と独特の社会的生産関係を備えたプロト工業資本主義のシステムに内在する矛盾の条件でもあった（B.95-96）。

Ⅲ　家族経済の機能モデル

プロト工業システムにおける家族経済の機能的意義は，それに固有の前資本主義的経済の論理によって説明することができる。それは，今世紀の初頭に初めて，ロシアの農業経済学者A.V.チャヤーノフによって経験的に分析された。かれの本来の分析対象は農民社会であったけれども，そこで検証された家族経済の論理がもつ認識手段としての有効性は，次節以下で示されるように，それをプロト工業家族に適用してみることによって明らかになる（A.262；B.101）。

家族経済に固有の経済論理の決定的に重要な特徴は，その生産活動が利潤の極大化や金銭的剰余の蓄積への関心によって規定されていないという点にある。家族経済にとって重要なものは「家族労働」の総収益であって，純収入ではない。「全き家」における生産と消費の密接な結合の結果として，家族労働の収益は単一不可分の「総労働所得」[15]（チャヤーノフ）として実現される。家族的な生産関係と消費関係の構造に基づくこうした態度は，フローとしての「所得」とストックとしての「資産」を区別する費用・効用計算を排除する。工業労働の収益と農業労働のそれとが分離されないのと同様に，各個人の労働の分担や所得の分け前についての明確な区分もない。家族経済がまずもって目指す目標は，金銭的剰余を稼ぎ出すことではなく，社会文化的に規定された家族の生存維持のための欲

求を充たすのに必要な物を確保することである（A.262-263；B.97-98）。

家族経済を営む生産者たちの生産と消費の過程にたいする関係は，使用価値の生産というその基本的な関心によって規定されている。かれらの生産する財が市場関係と貨幣関係に入り込み，商業資本のものとなる「剰余」を生み出すところでさえも，商品生産と商品交換にたいするかれらの関係は使用価値生産者のそれである。かれらの関心はあくまでも消費にあり，かれらの生産的努力は全体として見れば家族の生存を確保することに向けられているのであって，交換価値の生産による剰余の獲得に向けられているのではない。資本主義的生産関係のもとにおいてさえ，家族経済は依然として前資本主義的保護地区にとどまるのである。資本主義的な成長と再生産の過程にとってのその機能は，そのような条件下においてさえもそれが「反剰余システム」[16]（M.サーリンズ）として行動するということのうちに認められる（B.97-99）。

こうした家族経済内部の機能的関係に対応して，生産の強度ならびに労働収益の大きさと消費の大きさは，労働支出の苦痛度と家族の欲求充足要求との均衡を樹立するという原理にしたがって調整される。この「労働と消費のバランス」[17]（D.ソーナー）の両サイドは特殊な相互依存関係に立っている。家族の生存維持のための欲求の増大は，労働支出の増大に結果するのだが，前者は，短期的・中期的には一般にとりわけ「人口学的分化」[18]（チャヤーノフ）によって，すなわち，家族周期の第一段階における世代の再生産とともに家族の消費者数が利用できる労働力に比して増加することによって，生じる。この労働支出の増大は，労働する者一人あたりの収益の，したがってまた家族の労働収益全体の増加をもたらすけれども，それに対応する消費者一人あたりの収益の増加をもたらすわけではない。限界労働支出が増大しても，消費水準の低下が起こりうるのである（B.99）。

家族経済の限界効用・限界収益および限界労働支出は，こういった「内部経済的」諸要因の均衡に決定的に依存している。だがこの均衡は，家族成員の主観的選好などから生じるのではない。その論理は「全き家」の構造的・機能的結びつきに根ざしている。つまり，生産と世代の再生産と消費を家族成員の共通の生活関連において結合し組織する自立的な社会経済的構成としての「全き家」のあり方そのものに由来しているのである。家族経済における労働供給の増減は，外的な生産条件だけによって完全に規定されているのではない固有の法則性に従う。内的な均衡が達成されない限り，充足されていない生存維持のための欲求は，経済を営む家族を強力に超過労働へと駆り立てる。例えば，不利な市況や土地の細分化あるいは人口の稠密化といった外的生産条件の悪化のために労働所得が低下したような場合，家族はその労働支出の増加へと駆り立てられる。この増加は，発展した資本・賃労働関係において一般的な――生産諸要素の「生産性」と「収益性」にたいする資本の利害関係によって規定されると同時に限界づけられている――限度を越えることもありうる。家族経済にとって決定的なことは，それ自身の生存維持の確保である。その昔からの生存維持が危うくなると，労働過程における家族の「自己搾取」[19]（チャヤーノフ）は，

「他者による搾取」の強度をまるで越えてしまうこともありうる。というのは，家族的生産単位の行動様式を第一に規定するのは，生産性への考慮ないしは労働単位あたり可能な限り高い平均収益への関心ではなく，不利な条件下において家族が生き延びられるチャンスを最大限にする可能な限り高い「総労働所得」への関心だからである。また家族経済には労働力の利用に代わる代替手段がないので，自己の労働力の酷使によって総収益を増やす以外に方法がないからである。そしてほかならぬこの「自己搾取」への性向のゆえに，前資本主義的家族経済は，資本主義社会の生成と継続的再生産の過程における中心的な構造的契機になりえたのである（A.263；B.100-101）。

家内経済の「労働と消費のバランス」という自動的な調節機能には，もう一つの逆の側面がある。それは，例えば景気の回復によって外的生産条件が改善されて，家族の収益が増加するような状況の場合に現われる。この場合それ以上の労働支出は中止され，もし余剰収益があれば，それは消費と余暇に換えられる。その結果がいわゆる後屈型の労働供給曲線にほかならない（A.263；B.101）。

元来は農工未分化の生存維持経済に特徴的なこうした家族経済の自己調整システムは，プロト工業化への移行においてもその有効性を少しも失わなかった。それどころか，家族経済の生産の論理は，プロト工業化の開始条件として働いた。なぜなら，土地不足および土地のない生産者たちは，家族の生存維持と家族経済の自立自存を確保するために，手工業労働という形態での「自己搾取」に向かわざるをえなかったからである（A.263-264）。

Ⅳ　農村家内工業と市場経済

伝統的な農業社会における農民世帯は，農業で生活を立てていたといっても，農産物だけしか生産していなかったわけではない。家族の需要や局地的な需要を賄うための手工業製品の生産は，「全き家」の「年間労働」の典型的な特徴であった。手工業生産は，「農工が一体となった家族労働」[20]全体のなかの可変的要素で，農閑期に主として婦人や子供によって営まれていた。だから「全き家」の生産構造には，土地集約的な農業生産の，労働集約的な工業生産による代替の可能性が，最初から内在していたのである。しかしながら，農業生産における労働力の「自己搾取」だけではもはや農民世帯の生存維持が保障されえないような状況にたち至るまでは，労働集約的な工業生産への移行は単なる可能性の域を出るものではなかった（B.102）。

ヨーロッパの農業社会にそうした状況を出現させたのは，人口の増加であった。急激な人口増加は，農業の景気変動や地代あるいは租税の引き上げという形をとった領主側の圧力と相俟って，小農や農民以下の限界生産者の発生を伴う農村人口の階級分化をもたらしたのである。そして，これら限界農民の生存維持経済の，市場関係および貨幣関係への部分的編入こそ，長期的低下傾向にあったかれらの所得を，農業における労働支出の増大だけでは埋め合わせることのできないほどの水準にまで押し下げた決定的要因であった。こ

の編入はいわば「強いられた商業化」[21]（W.クラ）であって，部分的な交換を余儀なくされた限界生産者たちは，市場から利益を得るよりも，むしろ逆に市場によって生産条件や所有状態の累進的な悪化に晒された。なぜならば，穀物が不作で高価格の年には，かれらは——自家消費に必要なだけの収穫高を上げることができず——不足分の購入と負債に追い込まれた。しかも，穀物が低廉な豊作の年にその借金を返済することは——低い限界生産力のために十分な販売量を生産できなかったので——ほとんど不可能であったからである（B.102-103）。

こうした状況のもとで起こった，土地不足の生産者や土地のない生産者たちの労働集約的な工業的商品生産への移行は，決定的な生産手段である土地の欠乏ないし喪失によって生じた生計の空隙を，市場で追加的貨幣所得を得ることによって埋め合わせようとする試みと見ることができる。農産物に不利で工業製品に有利な方向への「交易条件」のシフト——例えば海外での需要増加による——が，限界生産者でない人々にたいしてもそうした移行への刺激を与えたことは確かである。しかし，そのような価格関係のシフトは，農村家内工業の生成のさいの決定的な解体的要因では必ずしもなかった。通常の場合に決定的だったのは，構造的な契機，すなわち，「強いられた商業化」のもとでの零細な農業生産者の限界的状況であった。そうした条件下では限界生産性は農業よりも工業分野において高かったので，農村工業への移行は相対的に恵まれた生存可能性を提供したのである。そしてそれは，家族的生存維持経済の論理に支えられていた。家族的生存維持経済は，工業生産への労働支出を——労働単位あたりの平均収益が逓減しても——増やし，これによってどうにか不十分な農業所得と家族の最低限の欲求との不均衡を除去することができた。このような労働支出の方向転換は，生存維持のための適切な戦略であった。というのは，家族経済は，工業部門におけるほうが農業生産と同じほどには，労働支出の増大に伴う限界収益逓減のディレンマに悩まされずにすんだからである。だがしかし，市場との結びつきは，工業生産においても決して永続的な生存維持を保障するものではなかった。生産物市場や原料市場での需要の増減といったような，景気変動の波に直面せざるをえなかったからである（B.103-104）。

家族労働は，市場で実現される価値を生産したのであるが，しかしその生産活動は価値法則によって完全には支配されていなかった。家族労働は，ある程度まで商品生産の循環の外部で，生産し自己を再生産していたのである。「全き家」の交換関係は，生産費や労働力の再生産費を必ずしもカバーするものではなかった。その金銭的収益をそれに対応する未熟練労働者の賃金率で測った場合，しばしば欠損が生じた。このことは，生産過程と消費過程の重要な部分が，したがってまた労働力の再生産の重要な部分が，商品交換に基づく経済循環にまだ全面的には組み込まれていなかったという事実から説明することができる。農村家内工業者の家族経済は，工業的商品生産に貢献したけれども，市場での生産の規制と価値評価に入り込んではいなかったのである。そして，このような「前資本主義

的商品生産[22]」（P.スウィージー）に特有の「二重経済」という条件下においてのみ，農村家内工業者の家族は――ギルドとの競争に対抗して――市場に接近するチャンスを得ることができた。というのは，農村の家内工業者が市場に接近できるチャンスは，商品の価値に含まれるのは実際の生産費の一部だけで，したがって実現されたその市場価格はかれらの労働力の「原価」にも充たない，という条件のもとではじめて可能であったからである（B.104-106）。

農村家内工業者の世帯は，一方では，家族経済の枠内でその生存を維持するために，工業的商品生産を，それゆえ資本主義的に組織された市場とのつながりを必要とした。だが他方では，商品市場での競争力をつけるために，少なくとも部分的には，前資本主義的なコンテクストでの生産・消費および再生産を強いられた。それゆえ，家族が稼ぎ出す，ないし生産価格の形態で受け取る貨幣所得は，交易条件の変動に左右されるけれども，その額は商品交換のメカニズムによって完全に規定されているわけではなかった。労働力を振り向けるべき別の代替的用途がない「機会費用ゼロ」のもとでは，非自発的な余暇が超過労働に代わる唯一の選択肢である。また，家内経済に結びつけられた労働力の地方的流動性の欠如――それは，家族の生産と再生産と消費の結びつきの構造的統一，およびプロト工業家族経済の農業的生存維持基盤への部分的依存に起因する――は，労働力の地方を超えた労働市場への完全な編入を妨げ，まさにそのことによってフレクシブルであり安価でもある労働供給をもたらした。農村の家内工業生産者の貨幣所得は，それと同列にある賃労働者の賃金を常に下回っていたのである（B.106-107）。「だからここでは，生産者が自分の生産物の貨幣価格に依存するという資本主義的生産様式の不利が，資本主義的生産様式の不十分な発展から生じる不利に加重される。農民は，自分の生産物を商品として生産することができる条件なしに，商人や産業家になるのである[23]」（マルクス）。

農村家内工業者が陥っていたディレンマを特徴的に表しているのは，流行病のようにかれらを襲った借金である。家・土地および生産手段の所有ないし賃借は，農村家内工業者の生産と生存にとっての前提条件であるが，この前提条件への特殊家族経済的固執は，ほとんど「必然的法則」として，「生産条件の累進的悪化と生産手段の高騰[24]」につながった。いくつかの地域的事例について調査・確証された傾向を見ると，プロト工業化の進展につれて，全人口にたいする独立家内工業者の比率が高まっているのと同時に，負債によるかれらの平均的な財産状態の悪化が進行していることが分かる[25]。負債増大の原因は，家・耕地および生産手段にたいする農村家内工業者の態度――つまり，伝統的な農業社会における農民生産者と同じように，それらを資本としてではなく，家族的生存維持経済の存立手段として扱う態度――にあった。しかも，それらの物がもはや十分な存立の基礎ではなくなり，かれらの労働生産物がかれらにとってすでに直接的使用価値としての意味をほとんど失い，それが貨幣に転化されるべき価値形態をとる限りでしか家族の生存にとって意味をもたなくなってしまっても，まだかれらは依然としてそれらを生存維持経済の存立手段

とみなし，それらにしがみつくことをやめなかったのである。そして皮肉なことに，小生産者たちを窮乏と借金へと追い込んだものは，この「独立への衝動」であった。一時的にせよこの「独立への衝動」を満たすために，かれらは――前もって貯えることなく――当座の所得から固定資本をつくり，結果的には長期的な負債を抱え込むことになったからである。こうして農村家内工業者の家族経済は借金経営への依存を強め，一方では消費信用の利用を通じてパン屋や肉屋に従属し，他方では原料と生産手段を購入するための資本不足のゆえに問屋や高利貸に従属していった（B.108–112)。

V　家族経済と商業資本

農村工業の家族経済的生産様式は，プロト工業システムの形成と展開と内的矛盾との関連でどのようなマクロ経済的作用を及ぼしたのであろうか。今度はこの問題に目を向けてみよう。

農村家内工業者の家族経済は，その自己搾取のメカニズムを通じて，商人や前貸資本家に特殊な「差額利潤」(Differentialprofit) の実現を可能ならしめるというマクロ経済的効果を発揮した。この「差額利潤」は，一方ではギルド制手工業の生産関係から生じる利潤を上回ると同時に，またマニュファクチュアの賃労働関係から得られる利得をも凌駕するものであった。こうしたことが起こりえたのは，家族成員が生計維持のために支出する剰余労働が不払いとなるからであった。このことは特に婦人と子供の労働について妥当する。両者は，家族労働の欠くべからざる部分を担ったにもかかわらず，それに見合って家族の労働収益が上がることはなかった（A.264；B.112–114)。

部分的にであれまだ農業的基盤を有する家内工業者たちは，かれらの労働をその「実費」以下で供給したとしても，この生産関係のなかでなんとか生き残ることができた。しかし，土地なき家内工業者の家族は，競争のためにその労働力の価値が補償されないような条件下では，傾向的に生存限界を下回る所得しか稼げなかった（B.114)。「家族が自分の小さな菜園や畑地で働いて得たものを，資本家が労働力の価値から控除できるようにさせるものは競争である。労働者はどんな出来高賃金でも受け入れないわけにはいかない。なぜなら，そうしなければかれらはなにも手に入れることができず，自分の土地の生産物だけでは生きてゆけないからであり，他方では，ほかならぬこの農耕と土地保有がかれらをその場所に縛りつけて，別の仕事を探すのを妨げるからである[26]」（エンゲルス)。

家族経済的生産様式がギルド的生産関係に組み入れられている場合には，商業資本や前貸資本による工業的商品生産の拡張は，ギルド制度そのものによって限界づけられていた。つまり，相対的に高い労働所得のおかげで，ギルドに組織された生産者たちは，農村工業におけるよりも十分な暮らしができたし，また商業資本や前貸資本は，農村工業で得られるような高さのキャピタル・ゲインの実現を阻まれていたのである。これと競争関係にあるマニュファクチュア的生産部門においても，企業家の平均利潤は，農村工業の場合に比し

て低い水準にあった。企業家は，労働力の再生産費を賃金として支払い，農村工業よりも高額の固定資本経費を支弁しなければならなかったからである。こういった不利のために，家内経済的生産様式のマニュファクチュア的生産様式による代替が功を奏する余地は，著しく制限されていた。といっても，同一産業部門内での両者の補完関係が排除されていたわけでは決してなく，第一次生産段階の労働過程は家内経済の形態に編成され，最終加工および仕上段階は集中的な生産形態をとる，という関係がしばしば見られた。しかし，こうした社会的生産関係においても，量的には，すなわち就業者の数からいえば，家内経済的生産様式のほうが優勢であった。「マニュファクチュアは，都市の手工業と農村の家内工業という幅広い土台のうえに経済的芸術品として聳え立っていた[27]」（マルクス）。要するに，伝統的農業社会から産業資本主義への移行局面における基本的な生産関係は，マニュファクチュアではなく，小農および農民以下の家族経済と商業資本との独特な結びつきにおいて確立されたのであり，マニュファクチュアはあくまでその補完物にすぎなかったのである（A.264；B.115-116）。

このような観点から農村家内工業を営む下層民の家族を見ると，それは，流通資本の受動的な搾取対象であるばかりでなく，同時に生成途上の資本主義の成長過程における重要な主体として現れる。農村家内工業者の家族が客観的にみてプロト工業化の内的推進力として機能したのは，それが主観的には伝統的な家族的生存維持経済の規範と行動様式に拘束されていたからであった。この視角から眺めれば，近代資本主義生成の基本的な契機は，「プロテスタンティズムの倫理」と，この倫理に主観的に内在し，客観的には資本主義的労働関係によって強制される労働規律ではなかった。むしろ，かれ自身亜麻布業者の子孫であったマックス・ウェーバーによって意識の隅に押しのけられた「こうした基調をもった前資本主義的経済労働のこのうえなく頑強な抵抗[28]」こそ，近代資本主義生成の主要な契機であった。農村家内工業者の家族経済は，自らのために資本を実現できなかったし，また実現しようともしなかったけれども，固定資本の危険負担を肩代りすることにより，特別な資本関係の利用を問屋や商業資本家の手に委ねたのである。「家内工業の雇主である問屋は，固定資本をもっていない。かれの機械は家内労働者たちである。かれはいつでもかれらの活動を停止させることができ，しかもビター文失わないのである[29]」（K.ビュヒャー）。いずれにしても，近代資本主義の生成とそのプロト工業化の局面は，農民の「全き家」がその歴史的発展の最終段階ないしその崩壊段階で果たした特殊な機能と切り離しては考えられない。このような家族経済と商業資本との共生関係の洞察から得られる認識は，この特殊事例の理解を可能にさせるだけでなく，前資本主義的保護地区ないし伝統的な社会的「サブシステム」の保存が資本主義社会の展開と安定化にたいしてもちうる非常に重要な機能を明らかにしてくれる。が，それはともかくとして，いま問題にしている事例について言えば，このプロト工業システムは，その構造的基礎のうちに，自己のアウフヘーベンへと行きつく重大な契機を宿していた。そしてこの矛盾は，生産性の上昇と剰余の増

大に無関心な家族経済的生産様式の「労働と消費のバランス」の反面として現われ，結局それはこのシステムそのものの再生産と拡張を妨げることによって否定的な仕方で産業資本主義への移行の決定的な要因となるか，あるいはプロト工業化のあとに「工業化からの後退」(De-Industrialisierung) という逆行現象をもたらすことになった（A.264-265；B.116-117)。この問題については，本節の最後でもう一度触れられる。

農村家内工業者の家族経済と商業資本ないし前貸資本との共生関係という「移行の生産様式」の典型的形態においては，生産部面においても資本の支配が強まっていったのであるが，しかしこの生産部面での資本主義化の進行は，前資本主義的生産様式の破壊を伴っていたわけではない。家族経済的セクターから資本主義的セクターへの絶えざる価値移転は，古い生産様式の破壊ではなく，むしろその保存から生じたのである。まさに生産が資本によって征服されていなかったがゆえに，つまり「資本にとって外在的な・資本から独立した社会的生産形態に基づく，資本の発展」[30]（マルクス）のゆえに，家族経済は重要な構造的要因たりえたのであった。農村工業の中心的な社会的生産関係は，とりわけそれが家族経済的労働過程にしっかりと根を下ろしていたことによって特徴づけられる。そしてそのことは，家内工業の生産者たちが生産過程を事実上コントロールすることを可能にさせた。だからここでは，資本主義化の進行は，それに比例した商業資本や前貸資本による生産過程のコントロールの増大を意味せず，大抵は生産物にたいするコントロールを意味するにすぎなかった[31]。原料や完成生産物のみならず，土地や家や生産手段の所有名義がますます商業資本家や前貸資本家に移っていったときでさえ，生産過程にたいする事実上のコントロールは，家内工業を営む生産者たちの手に残されたのである。だがまさにそのためにかれらは，かれらの労働の客体的な条件と産物が，すでに資本の構成要素と化してしまってからも——外観上の自立性に欺かれて——それらが自分たちの「所有物」であるかのごとき錯覚から抜け出せなかった（B.117-118)。

このような社会的生産関係に由来するプロト工業システムの矛盾は，技術革新にたいする鈍感な反応と取引コストの法外な増大となって顕現した。広く散在する労働者たちをして，市場の要求する技術と流行を取り入れるように仕向けることの難しさは，「問屋制度のアキレス腱[32]」(W.トレルチ）であった。生産単位の空間的分散と労働過程にたいする家内工業生産者の事実上のコントロールとに起因する，社会的生産関係の非弾力的性格に対応して，流通部面での利得を第一の関心事とする問屋は，販売が程々の利得をもたらす限り，生産部面にはタッチしないという傾向が見られた。だが，この社会的生産関係の矛盾が最も鋭い形をとって現われたのは，問屋にとって皮肉なことに，問屋に最大限の利得獲得の機会を提供する好況局面においてであった。というのは，労働力への需要が増大し，家族所得の上昇が可能となるまさにそのときに，「全き家」の「労働と消費のバランス」の原理は，「生産的」労働の支出を削減し，その一部を消費と余暇に，祭やゲームや飲酒に変えてしまうからである。問屋商人や商業資本家が生産拡大と利得増大のために労働力

の追加的供給を渇望するまさにそのときに，例の「後屈型の労働供給曲線」が現われるのである。この矛盾は，長期的には，プロト工業システムの再生産と拡張の動態と両立しなくなる。こうしてそれは，自らを越えて産業資本主義に移行するか，あるいはプロト工業化のあとに「工業化からの後退」（De-Industrialisierung）へと逆戻りするという道を辿ったのである（A.265；B.119）。

Ⅵ　世帯形成と家族構造

使用人のいない核家族が，農村家内工業者の世帯の支配的な類型であった。このような核家族世帯は，古い農業社会の解体期において，プロト工業世帯を他の農村住民の世帯から区別する特色ではない。むしろそれは，零細農民や農民以下の階層の圧倒的部分に共通する特徴であった。[33] しかし，階層間の比較を行ってみると，農村家内工業者の平均的な世帯規模のほうが，農業労働者のそれよりもかなり大きいことが判る。[34] これまで公表された分析によれば，その決定的な要因は，同居している子供の数が多いことであるが，それは決して，家内工業者の家族の繁殖力の上昇の結果であるようには思われない。また，幼児死亡率の低下がその原因であったようでもない。子供数が平均的に多かったのは，むしろ，プロト工業地域における結婚年齢の低下と一定年齢層に特有の流動パターンの変化とによるものであった。最近の諸研究が実証しているように，農民たちの慣習であった，一人前になるための通過段階としての伝統的な使用人身分は，農村家内工業者のあいだではその意義をほとんど失っていた。農村家内工業者の子供たちは，農民や農民以下の階層に属する者たちよりも，長く両親の家に留まりかつ早く結婚したのである。織布工や紡糸工や編物工の子供たちの場合には，かれらが家族の一員として行う仕事が，他人の世帯で行う使用人としての仕事に取って代わった。だが，この変更は自由な選択の結果ではなかった。「貧乏人の資本」としての子供の労働は，農村家内工業者の生存にとって必要不可欠のものだったのである。[35]（A.265–267；B.119–122）。

ところで，若者たちが両親の家により長く留まるようになったことの結果，かれらの結婚年齢が低下したにもかかわらず，農村家内工業者の平均的な世帯規模は大きくなったが，その家族構造は，農民の直系家族のパターンには従わなかった。つまり，家族労働力への子供の強制的な統合，両親の家での長い社会化の期間，そして早婚は，三世代の大規模な世帯を形成する刺激を与えるほど緊密な世代間の結びつきをもたらさなかったのである。それどころか，市場経済の浸透による農業的基盤の解体とプロト工業的生産様式への移行は，農民層の世帯形成と家族形成を支配していた原理を失効させることになった。農民層の世帯の形成は，希少でしかも相続によってのみ獲得できる資源と必然的に結びついており，これが決定的な構造的規定要因を成していた。そしてこれによって，制限的な結婚パターンと「全き家」での複数世代の同居を余儀なくされていた。ところが，農村家内工業者の世帯形成と家族構造は，これとは根本的に異なった条件のもとにあった。ここでは，

世帯形成と家族構造の「有形の」規定要因としての相続財産は，労働組織としての家族の圧倒的重要性のまえにその意義を減じてしまっていた。生産と消費の単位としての家族の形成は，もはや必ずしも相続による財産の移転に拘束されず，それに代わって，なによりも労働組織としての家族を形成する可能性が生まれたのである。その結果，若者たちの結婚問題にたいする両親のコントロールが弱められただけでなく，それと同時に，これまでは財産相続と家父長的支配によって保証されていた世代間の構造的な結びつきも緩められた。両親はますます子供たちの労働に依存せざるをえなくなっていったのであるが，家を去って新しい核家族を築こうとする子供たちに対してどんな制裁手段も持っていなかった。こうして結婚と家族形成は家父長的支配の束縛から抜け出て，それらはもはや財産関係によって「有形的に」決定されなくなり，生産過程におけるその「物質的」基盤を失ってしまったのである（A.267-268；B.122-123)。

同時代人たちが「乞食の結婚」と呼んで非難した，大した結婚資金も遺産もなしに紡車二つだけをもって行われる結婚は，世帯形成と家族形成の条件が変わってしまったことを示唆している。今や結婚と家族形成は，全家族労働力の活用度を高めることにその基礎を置いていた。プロト工業化の展開した地域で，農村家内工業者の世帯形成を左右したのは，両パートナーの最大可能な労働能力であった。結婚相手としての女性の価値を決定したのは，父親の職業や財産や社会的地位によって示される彼女の氏素性ではなく，働き手としての彼女の技能であった。農村家内工業で家族労働力を活用するための新しい客観的条件は，職業上の技術をもった結婚相手を選ぶことを決定づけ，さらにそれは，若い男女がそのライフサイクルのできるだけ早い時期に新しい家族経済を形成することを要求した。というのは，最大限の所得機会は両パートナーの最大限の労働能力に依存しており，労働能力は比較的若い年齢で最適状態に達したからである。こうして，農民たちのあいだで新世帯の形成を制限していた制約条件が除去されたばかりでなかった。プロト工業家族経済の生産様式は，市場の状況と農村の生産者の貧困とによって規定された，世帯形成の新しい前提条件をも創り出したのである。そしてこの条件は，農村家内工業者の家族形成の過程を支配しただけでなく，家族の全ライフサイクルの規定要因として，世代の再生産と家族構造をも決定づけたのである（A.269-270；B.123-124)。

なによりも労働組織として構成された家族経済は，独特の人口学的行動パターンを生み出した。つまり，家族の労働力を最大限に利用すべしという至上命令は，早婚と夫婦のチームワークを要求したばかりでなく，それはまた，しばしば家族がその出発点から陥っていた困窮状態を生き延びるために，できるだけ多くの子供の労働力の産出によって生産能力を上げるような人口学的行動パターンを助長したのである。しかも，ここで一つのパラドックスが現われた。すなわちそれは，物質的条件と相続財産からして多数の子供を養うことのできる能力の最も少ない連中が最も沢山の子供を生むというパラドックスである。そのうえ，早婚と多産的繁殖への動きは，ある限界内においてではあるが，景気変動によ

って規定された労働需要とは多かれ少なかれ無関係に起こった。そして景気が悪化しているときでさえ，農村家内工業者たちは，農民層に見られる伝統的な制限的結婚パターンとそれに対応する繁殖パターンに戻ることはなかったのである（A.270–271；B.124–125）。

プロト工業家族を特徴づける早婚と多産性は，核家族内部での労働組織の変化を伴っていた。そしてこの労働組織に生じた「内的構造変化」[36]（R.ブラウン）は，両性間での分業の変化，家族内での役割分担の変化ならびにその社会的性格の変化において判然と示された。プロト工業家族経済の歴史は，産業資本主義の前史の一部であると同程度に，農民社会の長い後史の一部でもある。プロト工業家族経済は確かに社会的分業の発展過程に引き込まれており，この過程は，家族経済の個別的な生産機能の喪失とその生産組織としての特化をもたらした。しかしながら，構造的な労働組織としては，プロト工業化期の家族経済は実に極めて強い凝集性をもっていた。この点に関する限り，それは決して分解過程にあったわけではない。むしろ反対に，不利な状況下での共稼ぎは，農民家族が必要とした以上の機能的統合と構造的凝集を要求した。制約された条件のもとで家族経済が生き延びていくためには，個々の家族成員の乏しい労働資源を最適に配分してバランスをとらねばならなかったからである。そして市況の如何と生産部門によっては，この経済的必要性は，両性間および年齢階層間の伝統的な分業関係を廃止してしまうところまで行った。このように農村家内工業者の生産過程は，農民や小農や農民以下の階層の場合よりも弾力的な家族成員の役割分担によって特徴づけられる。特に，農民の世帯に共通していた――原則として男は外の畑で働き，女は家政の仕事（これには，家族の必要を充たすための手仕事，野菜栽培，搾乳，小家畜の世話，余剰生産物を市場に持って行くことなどが含まれていた）を受けもつという――男女間の仕事の区別は，存在しなかった。小農や農民以下の階層においては，こうした両性間の分業関係が事実上消滅してしまってからも，男は依然として家内労働の領域から排除されたままであった。他方，女性の労働部面は，この階層においてその範囲を広げ，ますます重要になっていった。家族経済の死活に係わるマージンは，ほかならぬ妻の労働によって確保されたのである（A.276–278；B.131–133）。

プロト工業世帯は，この農民以下の階層のパターンを踏襲すると同時に，男性がいわば家に戻ることによってこのパターンに変更を加えた。少なくとも繊維工業部門においては，男性は，農業的基盤が少しでも残っている限りは，家の外での仕事を止めることなく，すでに伝統的に女性によってつくられていた労働環境に入った。だから，女性を「農民の家内工業の中核部隊」[37]（K.A.ウィットフォーゲル）と呼ぶことは，このような歴史的意味において正当であるように思われる。しかしながら，一般にプロト工業的状況を特徴づけたのは，男女間の生産機能の著しい同化・融合である。女の刃物鍛冶や釘製造工や工業品販売組織者がありふれたものであったのと同じほど，男による紡績やレース編みも稀ではなかった。生き延びていくためのこうした家族労働組織の変容は，ときには，男女間の伝統的な仕事の区別の消滅に留まらず，それをこえて逆転にまで行きつくこともあった。生

産活動のために女性が家事労働を放っておかざるをえないところでは，男性が従来の主婦の役割を引き受けることによってこれを埋め合わせた（A.279-280；B.134-135）。

こうした性別や年齢差に基づかない家族労働の分担は，生産部面の外においても，家族成員の社会的行動様式，特に消費や性的な関係と態度を規定した。詳しい研究調査は乏しいけれども，農村家内工業者のあいだでは，消費における両性の役割行動は，伝統的な役割分担——これに従えば，男性が一家の主たる稼ぎ手として特権的な消費者の役割を演じ，社会的なステイタスに係わる消費を委ねられ，これにたいして女性は家事と日用品の調達を専らとする——に縛りつけられていなかった，という指摘がなされている。まさにステイタスに係わる消費のうちに，男女の同権が象徴されていた。農村家内工業者は，男も女もともに，「平民的公共性」（plebejische Öffentlichkeit）のなかで，飲酒や喫煙に表されるかれらの欲求を実現したのである。また，かれらの関心と行動の類似性は，受動的な消費においてだけでなく，伝統的な生活水準の能動的な防衛においてもはっきりと示された。女性は，食料暴動や物価騰貴反対行動に公然と参加したのである。さらに両性間の出逢いと結びつきという次元でも，変化が生じた。すでに述べたように，家族形成の前提条件としての財産と相続の重要性が減少したために，政治的・家父長的なコントロールは弛緩していた。その結果は，パートナーのより個人的な選択と家族形成の自由の拡大であり，これらはまた，徐々にではあるが「エロティックな感情世界の変容」[38]（R.ブラウン）を引き起こし，思春期年齢の低下と男女間における性的行動様式の同化をもたらすことになった（A.280-281；B.135-137）。

Ⅶ 「平民文化」の諸相

プロト工業化の成長局面においてさえ，同時代人たちの観察によれば，農村家内工業者たちは，快適な生活手段を欠く貧乏暮らしをしていた。といっても，かれらの生活様式が単なる肉体的生存の再生産に切り下げられていたというわけではない。むしろ農村家内工業者たちは，かれらに独自の社会文化的生活様式を，それを否定しようとするプロト工業的生産様式の圧力に対抗して，力一杯防衛した。そのようなかれらの社会文化的欲求は，儀礼や祭やゲームやスポーツや競技において示された。消費者としてかれらは，新しい消費習慣を発展させたが，また伝統的な消費水準を——それが脅かされたときには——暴力や犯罪を犯してまでも守ろうとした（B.138-139）。

農村家内工業者たちの怠惰と享楽欲は，繰り返し同時代の商人・問屋・牧師・医者・官吏・ジャーナリストなどの批判ないし非難の的になった。[39] とりわけ，重商主義的な政策と「ポリツァイ」は，低賃金と貧困の強制を，勤勉と禁欲への唯一の誘因として正当化した。このような批判は，全部が全部イデオロギー的なものであったというわけではない。というのは，それは——ネガティヴにではあるが——農村家内工業者の生活様式の中心的なモメントを指摘しているからである。農村家内工業者の行動は，しばしば「自発的不完全雇

用[40]」（D.C.コールマン）への傾向を示した。それは，生産が生産者の消費と欲求充足への志向によって支配されている経済の慣性の結果であった。この「モラル・エコノミー[41]」（E.P.トムソン）の核は，「全き家」の「労働」と「消費」の統一に存した。将来のために貯えるべしという市民的中産階級の尺度をもって測れば，農村家内工業者の家計運営は，その短期的な支出が長期的な所得と釣り合わないという事実によって特徴づけられた（B.139-141）。

農村家内工業者の「労働と消費のバランス」は，決して純粋に肉体的な生存最低限を目標として調整されていたわけではない。それはまた，常に高賃金よりも少ない労働時間が選好されるような，労働と余暇との機械的関係と解されるべきでない。農村家内工業者はその労働力をなによりもまず自分の家族の生存を確保することに振り向けたのであるが，同様にかれらは，公共的な社交を通じた社会文化的な自己再生，および奢侈や誇示的な消費にも関心をもっていた（B.142）。

労働と社会文化的な自己再生とのこうした密接な結びつきは，労働者の欲求に合わせて配分された労働時間の不規則性に，特に労働日と休日が交互に繰り返すリズムのうちに，はっきりと現われた[42]。というのは，農村家内工業者たちの年サイクルは，依然として農業生産のサイクルと教会暦年のカレンダーとに結びつけられていたからである。そして今やこれに新しいリズムが加わった。つまり，家内生産者たちは大体において定期的に週ごとに支払われていたので，週が重要なサイクルになったのである。一週間が労働と欲求充足をバランスさせる時間的単位となり，泥酔の日曜日と聖月曜日（ブルー・マンデー）で始まる週の前半はほとんど仕事にならず，仕事はもっぱら週の後半に集中して行われた。さらに，労働と社会文化的な自己再生との密接な結びつきは，個々の労働日と労働過程においても観察された。「織工たちは織機を動かしながら歌っていた。市場へ行くのは仕事であると同時に社会的な楽しみでもあった。職人や商人たちとニュースを交換したり挨拶を交わしたりすることは，経済的取引やサービスの取引に社交の要素を導入することになった」（B.142-143）。

欲求の表現と実現は，農村家内工業者たちにとって，肉体的な気晴しや，単調な労働にたいする心理的な補償として機能しただけでなかった。農村家内工業者たちの社会的自己再生は，単なる労働力の再生産ということ以上のもっと広い「社会的」意味をもっていた。それは独自の「平民文化[43]」（E.P.トムソン）の一部であり，そこでは，農民の日常生活における伝統的でしばしば「古めかしい」様々な時代の慣習が，プロト工業生産者たちの特殊な労働・生活条件および特殊な階級構造におけるかれらの位置から生じた新しい態度と結びついて，実に多彩な表現形態を示すユニークな総合を形成していた。特に好況のときには，この「平民文化」は伝統的な儀式にその表現を見出した。貨幣所得の増加とその結果としての労働意欲の減退は，ダイナミックな社会文化的自己再生の増大となって現われた。祝祭や年市や祭りでは，楽しみと官能的な喜びと社交性が結びついていた。かれら

が飲んだり，踊ったり，球技をしたり，闘鶏に加わったりすることは，かれらの官能的な喜びを，公的・社会的なものとして表現し象徴することを意味した。かれらにとって酒を飲むことは単なる私的な楽しみではなく，公的な行為であった。祭りやゲームや競技を通じて行われる労働力のリクリエーションは，かれらの欲望と欲求が集団的な行為によって象徴的に表される社会的行為であった。それらの象徴的な表現形態がこうした活動に与えている「公共的」意味は，その明瞭な外見が示している以上に，複雑かつ多面的である。祭りは楽しみを分かち合うのに役立っただけではない。祭りは，村落や共同体における団結と連帯を表現し確認したのである。また同時に祭りは，こうした連帯にもかかわらず存在していた日常生活における対立を，半分は冗談で半分は真面目なシミュレーションやパロディーの形で，いっそう際立たせることにもなった。そして祭りは時折，公認された一時的な政治的あるいは性的放縦によって，日常生活における正規の社会的統制を失効させ，こうして日常の世界を一時的にひっくり返すこともあった（B.143-145)。

農村家内工業者たちの「平民文化」は，地域的に限られていたけれども，「平民的公共性」として実現された。それは，地域的限定性とその担い手の補充の点ばかりでなく，とりわけその構造と機能の点でも，「市民的公共性」と異なっていた。というのは，「平民的公共性」にとっては，公共性と私的領域の分離も，消費や生産の非政治的領域と政治や教育や討論の公的・政治的領域の区別も，存在しないに等しいからである。その特殊な表現形態において，「平民的公共性」はむしろ，農民層あるいは貴族の「代表的公共性」と通底するところがある。この点は，農村家内工業者たちが，例えば，競馬や闘鶏やドッグレースのような，「代表的公共性」の典型的なパターンを模倣しその戯画を演じるとき，明白になる。だが，「代表的公共性」とは違って，「平民的公共性」は，支配の儀式化され象徴化された表現ではない。それは，集団的な行為を通じてなされる官能的な体験による日常生活の社会文化的な再生である。役割の逆転と社会的統制の一時的失効は，社会的懸隔の縮小と経済的差異の相対化に役立った。見たところ非政治的で基本的な生活の必要が政治的行為の誘因となったように，私的な事柄も――例えば，カッツェンムジークやシャリヴァリといった懲罰慣行におけるように――公的関心の的になった。「平民的公共性」の潜在的な政治的性格は，とりわけ景気後退の時期に現われる。そのとき，「大衆のモラル・エコノミー」は，その慣習的な生活水準を守って「平民文化」の存続を図ろうと必死になる。それが飢餓暴動や価格蜂起になろうと，問屋や仲買人にたいする自己防衛行為としての「慣行的な盗み」の形態をとろうと，商人資本家や権力にたいする匿名の威嚇による対抗暴力の行使に至ろうとも，あるいは共通の仲間意識を傷つけた連中の見せしめ的な処罰であろうと，「平民的公共性」の様々な相貌は，常にその関与者たちの欲求を表すための一定の規則にかなった社会的行為の表現であった。この行為は，とりわけその諸要求が慣習に則って行われる集団的実践であった点において「公的」であった（B.145-147)。

家内工業生産者たちの日常の消費行動もまた，「平民文化」に深く根を下ろしていた。

かれらの行動様式の基調は，同時代人たちによって繰り返し批判され，歴史家たちによってしばしば「非合理的」とレッテルをはられたように，「無駄な」贅沢品や，コーヒー・アルコール・お菓子といった嗜好品を消費する傾向をもっていた。かれらはまた流行の衣服や装飾品を好んで身に着けようとしたけれども，これらのものは労働力の再生産の必要からは説明されえないのである。反対に，肉体的な生命の再生産は，かれらのこのような不釣り合いな消費行動によって促進されるよりもむしろ阻害された。かれらは，追加的な貨幣所得を得ると，平生の粗末な食事を，しばしばお菓子その他の贅沢品の「過剰消費」（K．ビュヒャー）によって補ったのであるが，こうした消費の肥大化は，景気変動に伴う現象であるばかりでなく，構造的な現象でもあった。かれらの消費にたいする特殊な態度は，疑いもなく，かれらの欲求を満足させる新しい機会——市場の発展がかれらにたいして開放ないし強制した機会——への反作用であった。多くの農村工業における労働過程の条件は，追加的な欲求を創りだした。つまり，生産条件が劣悪化し，労働過程そのものが非人間的になっていくにつれて，コーヒーや紅茶やアルコールが，ますます不可欠になったのである。だが，市場の刺激も労働過程の劣悪化も，それだけで決定的な要因となりえたわけではない。贅沢品の消費は，社会的な表現手段として，「公共的」目的をもっていた。農村家内工業者にとって，それは社会的な競争——かれら自身の間ならびにかれらと他の階層・集団との間の——を意味していた。贅沢品の消費は，内部においては，かれらが新しい共属意識を発見することを可能にし，外部にたいしては，かれら自身を農民や市民の世界から引き離すのに役立った。贅沢品の消費は，ステイタスやプレスティジを示す消費として，農民の自己表示の昔ながらの手段，すなわち土地やその他の財産をもはや持っておらず，また市民的な「文化財産」の分け前にまだ与っていない，ないし与ろうとしない社会層が，シンボリックに自己を表示するための手段にほかならなかった（B.147-149)。「もはや身分が贅沢をつくるのではなく，贅沢が身分をつくるようになった」[44]（R．ブラウン)。

ところで，農村家内工業者たちにあっては，世帯と家族は，かれらの欲求が表され充たされる公共的な場から分離された別個の領域として存在していたのではなく，そうした場を構成する重要な要素として機能していた。かれらにとって家族は，もっぱら官能的喜びと基本的な欲求の満足が得られる遮蔽された情緒的な親密性の場ではなかった。生産の領域において仕事と家族生活が切り離されていなかったように，社会文化的な自己再生の領域においても，公共性と私的生活とは切り離されていなかった。農村家内工業者たちの楽しみと官能的喜びの中心的な前提条件は，物質的な生産と再生産の単位である世帯と家族であった（下記参照)。しかし，その真の表現は，公共的な社交の場にあった。かれらはまだ市民的家庭中心主義に染まってはいなかったが，同時にまた——少なくとも傾向的には——農民の共同体生活に課されていた特殊な制約，例えば性的行動や結婚パターンにたいする領主のコントロールからはすでに解放されていた。農村家内工業者の行動様式と農民

および農民以下の住民層のそれとの連続性と相違は，成人に近づいた若者たちの社会化によってはっきりと例証される[45]。家内工業者の場合，若者たちの社会化にたいして両親や学校が及ぼした影響は，比較的小さなものにすぎなかった。ここでは，未婚の若者たちの同輩集団（peer group）が重要な役割を演じた。こうした行動は一方では結婚への手ほどきに関する農民の伝統的な慣習を踏襲したものであるが，しかし他方でその性格は変わっていた。というのは，プロト工業化の特殊な社会的生産関係において，家父長的な統制が弱体化していたからである（上記参照）。官能性と性的行動は，農村家内工業者の同輩集団での社会化において，農民の共同体の場合に可能であったよりもはるかに自由に展開したのである。このことは，私生児の出生と婚前妊娠に見られるような「結婚の性的先取り」[46]（D.レヴィン）の頻発のうちに明瞭に示されている。このような行動様式は，伝統的な社会的統制からの自由の増大のしるしではあるが，エドワード・ショーターが主張するような[47]，感情の「親密性」と「私的性格」の増大という意味での性生活の個別性の「解放」へと向かう一歩とみなされてはならない。むしろ私生児の出生は，結婚と世帯形成の努力が――貧困と不安定な経済変動によって――挫折させられたことの結果とみなされるべきである。それは，パートナー探し・求婚・婚前の性的関係という伝統的なコースを辿ったのであるが，経済条件と社会的統制のあり方が根本的に変化してしまっていた。つまり，農民層の場合に見られたような，性的関係を世帯の形成に結びつける保証はもはや存在していなかったのである（B.149–151）。

プロト工業世帯は，その社会文化的再生に，大量の「感情的資本」(emotional capital) を投資したばかりでなく（この点はE.P.トムソンが強調している[48]），その貨幣所得のかなりの部分をも投資した。とりわけこうした「経済的な」点では，農村家内工業者たちの家族経済は，「平民文化」の中心点とみなしうる。確かに世帯と家族が「平民的公共性」の文化的環境全体を直接に決定したわけではない（これは，同輩集団や隣人団体や地方市場に社会的な場をもつ集団的な実践と慣習に堅く結びついていた）。がしかし，世帯経済に根ざす「労働と消費のバランス」は，これらの公共的領域と私的領域の結合を規制し保証したのである。農村家内工業者たちがますます貨幣経済と商品交換に依存しつつあった生産関係のもとで，「労働と消費のバランス」は，長期的には乏しい貨幣所得とその短期間の気前のよい消費という独特の不均衡を引き起こした。それは倹約や将来への配慮を無視した選好の結果であったが，こうした選好こそ「平民文化」の可能性の前提条件にほかならなかった。農村の家内工業生産者たちは，かれらの基本的な生活欲求のますます多くの部分を，資本主義的に組織された市場関係と商品交換のもとでかれらが稼いだ貨幣所得の補助によってやっとどうにか満足させることができるような状態になっていたにもかかわらず，伝統的な農民的・手工業者的家族経済のルールにしたがってかれらの生活を律していた。かれらは，貨幣がまだ一般的な媒介手段の役割を演じていない比較的固定した欲求選好体系の内部で行動していた。家内生産者たちは，生存への配慮から諸欲求の選好を

調整することよりも，アルコール飲料やタバコや白パンの消費を――そのような出費をする余裕などほとんどまったくないようなときでさえ――頑固に優先させた。この選好体系において現金収入の用途を決定したのは，効用と象徴的意義の序列におけるその特殊な位置であった。貨幣はここでは日々の生活の自己経営的再生産の必要をこえる剰余とみなされ，それゆえそれはステイタスやプレスティジを表す消費や余暇における欲求充足に向けられた。生活上の基本的な問題の解決は，農村家内工業者にとって，いわばまだ，交換と競争と経済変動がかれらの生存に課している諸条件の外部にある，と考えられていたのである――ちょうど農民経済が常にそのような仮定のもとで経営されてきたように。だが，プロト工業化システムの社会的生産関係とそのもとでの経済変動は，農村家内工業者にこうした保証を与えるものではなかった。家族経済の生産収益としての貨幣および交換手段としての貨幣は，農村家内工業者にとっても，それが前資本主義的諸社会の大抵の人々にとってもっているのと同じ意味をもっていた。それは高価なものであり，主として別の高価なものと交換されたり，社会文化的再生の領域で「合目的的」に使用されるよい音色の硬貨であった。直接的な生活欲求の充足をこえる貨幣収入は，財産の獲得に支出されない限り，なによりもプレスティジを表す品物や奢侈品を手に入れたり，祝祭やその他の社交的儀式のさいの誇示的支出を賄うのに使われた（B.151-153）。

20世紀の現代でも，ニューギニアのシアネ族，北ナイジェリアのティブ族，英領コロンビアのクワキウトル族は，かれらの原始社会的な生活環境に資本主義的な市場関係と搾取関係が浸透しつつある現実を目のあたりにしながらも，普遍的な貨幣と商品交換の意味を理解しえず，適切な「合理性」をもってこの新しい状況に対応しえないでいるが，農民的・手工業者的家族経済の諸条件から抜け出てきたばかりの農村家内工業者たちも，同様であった。十分な貨幣収入がある場合でさえ，かれらは，かれらに独自な経済的合理性のために，かれらの困難な条件下で生き延びられるチャンスを最大限に生かすように，消費と生産のバランスをとることができなかった。プロト工業資本主義下では，このような「生活態度」は，結局のところ，家族がすでに陥っていた貧困を激しくし長引かせるだけであった。それにもかかわらず，農村家内工業者たちは，新しい資本主義の制限された可能性を――但し，その制限を認めることなく――利用して多種多様な欲求を短期的・間歇的に表現し実現したのである（B.154）。

Ⅷ　若干のコメント

以上，私はハンス・メディックのプロト工業化論，特にその中心をなすかれの「プロト工業家族経済」論を，かなり詳しく紹介してきた。この最終節では，蛇足になるかもしれないが，若干の感想めいたコメントを記して本稿の結びとしたい。

メンデルスのプロト工業化論とメディックのそれを比較してみると，両者のあいだには対照的な面が認められる。すなわち，前者は，18世紀のフランドルを対象とした数量的性

格の強い地域史研究から出発して理論化を目指している。これにたいして，後者の一般理論構築の試みの基礎となっているのは，厖大な文献の渉猟であり，それは当該問題についての便覧さながらの観を呈している。そしてメディックのプロト工業化論の最大の特徴は，それらの文献で扱われている諸事実を新たなパースペクティヴから再構成するかたちで展開されている点にある。そのさいかれが家族経済の機能的役割を決定的なものとして重視していることは，私の拙い紹介からも読み取ることができるだろうと思う。

かつて，いわゆる「移行論争」の火付け役となったモーリス・ドッブの『資本主義発展の研究』が1946年に出版されたとき，カール・ポラニーは『ジャーナル・オブ・エコノミック・ヒストリー』誌上でその書評を行った。そのなかでポラニーは，ドッブはマルクス主義の悪い部分（労働価値説）を保持し，「市場組織は歴史的に制限された性質をもっているというマルクス主義の基本的洞察」[49]を捨て去っている，と批判した。残念ながらポラニーの書評は，この興味深い問題をそれ以上展開していないが，かれの業績が広く知られるようになった今日，かれの言わんとしたことについては大凡の見当がつくであろう。このポラニーと同じ視角からハンス・メディックのプロト工業化論を眺めてみると，かれもまた，マルクス主義の悪い部分（とポラニーが考える）労働価値説を受け入れているが，他方で同時に，「市場組織は歴史的に制限された性質をもっているというマルクス主義の基本的洞察」をも積極的に展開しており，これら両者の緊張関係がかれの立論に魅力を与えているように思われる。メディック自身，K．ポラニーの書評を，資本主義以前の諸社会の具体的な分析観点からする「極めて適切な批判」と評価し，次のように述べている。「ポラニーは，『前資本主義経済への労働市場概念の導入』を，封建制から資本主義への移行に関するドッブの分析の批判されるべき点と見ている。『ドッブ氏はマルクス主義の悪いところを保持し，良いところを捨て去っている。……〔かれは〕，市場組織は歴史的に制限された性質をもっているというマルクス主義の基本的洞察から離れていっている』」（B.106, Anm.54)。この引用文中の二重括弧の部分は，ポラニーの書評からの引用である。

最後に，疑問に感じたことを一つ述べておきたい。それはメディックによる「全き家」という概念のルーズな用い方に関してである。周知のようにオットー・ブルンナーがハインリッヒ・リール[50]からこの「全き家」という概念を借用したとき，かれが念頭に置いていたのは，通常は非血縁者である「使用人」(Gesinde, servant)をも含むオイコスとしての家であって，決して核家族だけから構成される世帯ではなかった。しかるにメディックは，一方で「使用人のいない家族が農村家内工業者の世帯の支配的な類型であった」(B.119) と言い，また「農民たちの慣習であったライフサイクルの通過段階としての伝統的な使用人身分は，農村家内工業者たちのあいだではその意義をほとんど失っていた」（B.121）とはっきり述べていながら，他方で農村家内工業者の「全き家」について語っているのである（例えば，B.93, 96)。これは，「全き家」概念の不当な拡張であるように思われる。

(1) 以上については，二宮宏之「西欧のプロト工業化」，社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣，1984年，24ページを参照。

(2) F. Mendels, Industrialization and Population Pressure in Eighteenth-Century Flanders, Ph.D.Dissertation, University of Wisconsin(1969).

(3) F. Mendels, Proto-Industrialization : The First Phase of the Industrialization Process, *Journal of Economic History* 32(1972), pp.241-261.

(4) これらについては，斎藤修『プロト工業化の時代』日本評論社，1985年，および同書に付されている「引用文献」目録，ならびに二宮宏之，前掲論文を参照されたい。

(5) 長谷川博子「女・男・子供の関係史にむけて——女性史研究の発展的解消——」，『思想』719号（1984年5月），40ページ

(6) 注(3)に挙げられたメンデルスの論文のサブタイトル。

(7) R. Tilly & C. Tilly, Agenda for European Economic History in the 1970s, *Journal of Economic History* 31 (1971), p.186.

(8) 本稿において記号Bで表された文献の標題。

(9) プロト工業化と「初期工業化」（Frühindustrialisierung）とは別の概念である。初期工業化とは一般に（本来の）工業化の第一段階を意味し，それが中部ヨーロッパで起こったのは19世紀の前半である。

(10) W.A. Lewis, Economic Development with Unlimited Supplies of Labour, *Manchester School of Economics and Social Studies* 22 (1954), pp.139-191 ; W.A. Lewis, Unlimited Labour : Further Notes, *ibid*. 26(1958), pp.1-32.

(11) E.J.ホブズボーム「17世紀におけるヨーロッパ経済の全般的危機」，トレヴァローパー『17世紀危機論争』今井宏編訳，創文社，1975年，3—71ページ。

(12) オットー・ブルンナー「『全き家』と旧ヨーロッパの『家政学』」，同『ヨーロッパ——その歴史と精神』石井紫郎ほか訳，岩波書店，1974年，151—189ページ，特に156ページ以下。

(13) A. Kroeber, *Anthropology* (1948), p.284.

(14) ラスレット『われら失いし世界——近代イギリス社会史——』川北稔・指昭博・山本正訳，三嶺書房，1986年，28ページ。

(15) チャヤーノフ『小農経済の原理』磯辺秀俊・杉野忠夫共訳，大明堂，1967年，73ページ。チャヤーノフの「経済古生物学」的なパースペクティヴの広さについては，A.V.チャヤーノフ「非資本主義的経済システムの理論の問題によせて」拙訳，『法経研究』（静岡大学）34巻1号（1985年9月），37—56ページを参照されたい。

(16) マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』山内昶訳，法政大学出版局，1984年，98ページ。

(17) D. Thorner, Chayanov's Concept of Peasant Economy, in : A.V Chaya-

nov, *On the Theory of the Peasant Economy*, ed. by D. Thorner, B. Kerblay & R.E. F. Smith (1966), pp.xv-xviii.

(18) チャヤーノフ，前掲書，29ページ。

(19) 同前，第一部第二章「家族経済における労働の自己利用と有利性の概念」，32—55ページ。但し，この訳本では，《Selbstausbeutung》は「自己搾取」ではなく「自己利用」と訳されている。その理由については，55ページの〔邦訳者附記〕を参照。

(20) マルクス『資本論』第3巻＝邦訳『マルクス／エンゲルス全集』25b，大月書店，1020ページ。

(21) W. Kula, *An Economic Theory of the Feudal System : Towards a Model of the Polish Economy 1500-1800* (1976), translated by Lawrence Garner, p.43.

(22) ポール・スウィージー「ドッブ批判」，R．H．ヒルトン編『封建制から資本主義への移行』大阪経済法科大学経済研究所訳，拓殖書房，1982年，50ページ。

(23) マルクス『資本論』第3巻＝邦訳『マルクス／エンゲルス全集』25b，大月書店，1040ページ。

(24) 同前，1034ページ。

(25) K.H. Blaschke, *Bevölkerungsgeschichte von Sachsen bis zur Industriellen Revolution* (1967), S.195.

(26) エンゲルス『住宅問題』第2版の序文＝邦訳『マルクス／エンゲルス全集』21，大月書店，337ページ。

(27) マルクス『資本論』第1巻＝邦訳『マルクス／エンゲルス全集』23a，大月書店，483ページ。

(28) ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』梶山力・大塚久雄訳，『ウェーバー』（世界の名著50）中央公論社，124ページ。

(29) カール・ビュヒャー「基督降誕祭に於ける家内工業」，同『国民経済進化論』淡川康一訳，雄渾社，178ページ。

(30) マルクス『資本論』第3巻＝邦訳『マルクス／エンゲルス全集』25a，大月書店，409ページ。

(31) H. Freudenberger & Fr. Redlich, The Industrial Development of Europe: Reality, Symbols, Images, *Kyklos* 17 (1964), p.378.

(32) W. Troeltsch, *Die Calwer Zeughandlungskompagnie und ihre Arbeiter: Studien zur Gewerbe- und Sozialgeschichte Altwürttembergs* (1897), S.318.

(33) M. Mitterauer, Vorindustrielle Familienformen. Zur Funktionsentlastung des„ ganzen Hauses" im 17. und 18. Jahrhundert, in: Ders., *Grundtypen alteuropäischer Sozialformen: Haus und Gemeinde in vorindustriellen Gese-*

llschaften (1979), S.35–97.

(34) R. Wall, Mean Household-Size in England from Printed Sources, in: *Household and Family in Past Time*, ed. by P. Laslett & R. Wall (1972), pp.159–203.

(35) I. Pinchbeck, *Women, Workers and Industrial Revolution 1750–1800*, 2nd ed. (1962), pp.122, 160, 168, 179, 232 ff., 272 ff.; E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (1970), pp.366 ff.

(36) R. Braun, *Industrialisierung und Volksleben* 1. *Die Veärnderung der Lebensformen in einem ländlichen Industriegebiet vor 1800* (*Züricher Oberland*), 1960, S.83.

(37) K.A.ウィットフォーゲル『中国の経済と社会』（下）平野義太郎監訳，原書房，1977年，249ページ。

(38) Braun, *a.a.O.*, S.68.

(39) E.S. Furniss, *The Position of the Labourer in a System of Nationalism. A Study in the Labour Theories of Later English Mercantilism* (1920; rpt. 1965), pp.117 ff.; W. Sombart, Die Arbeiterverhälthisse im Zeitalter des Frühkapitalismus, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 44 (1917/18), S.26 ff.; Braun, *a.a.O.*, S.181 ff.

(40) D.C.Coleman, Labour in the English Economy of the Seventeenth Century, *Economic History Review* 8 (1956), p.290.

(41) E.P. Thompson, The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century, *Past and Present* 50 (1971), pp.76–136.

(42) E. O. Thompson, Time, Work-Discipline, and Industrial Capitalism, in: *Essays in Social History*, ed. by M.W. Flinn & T.C. Smout (1974), p.56–97, esp. 70 ff.

(43) E.P. Thompson, Patrician Society, Plebeian Culture, *Journal of Social History* 7 (1974), pp.390 ff.

(44) Braun, *a.a.O.*, S.115.

(45) J.R.ギリス『<若者>の社会史』北本正章訳，新曜社，1985年，34ページ。

(46) D. Levine, *Family Formation in an Age of Nascent Capitalism* (1977), ch.8: 'Illegitimacy: Marriage Frustrated not Promiscuity Rampant.'

(47) E.Shorter, *The Making of the Modern Family* (1975), pp.80 ff. esp.255 ff. エドワード・ショーター「女性解放と産児制限の社会史」松野安男訳，『生活の時間・空間　学校の時間・空間』（産育と教育の社会史3），新評論，1984年，67—120ページ。

(48) Thompson, Patrician Society, p. 392.

(49) K. Polanyi, Review of : M. Dobb, *Studies in the Development of Capitalism, Journal of Economic History* 8 (1948), p. 207.

(50) ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール「全き家」寺田光雄訳，『埼玉大学紀要』（総合篇）第1巻（1982年）を参照。

〔付記〕 本稿は1984年度文部省科学研究費一般研究A（代表・上原信博）に基づく研究成果の一部である。